

まえがき

専門家に読まれるだけでなく、一般の方々にも読まれるのを願って本書は書かれた。

かつては外国文学についての専門書が、一般の読者によく読まれていた。最近はそのころのように読まれなくなったらしい。書く側にも原因があるのではなかるうか。かつて私の身辺では、研究者は一般の読者に向かって専門書を書けといわれていた。そのようにして書いておられた先学が、文科系に限られずにたくさんおられた。

まず『シンシア』という歌の内容を素描しておきたい。初耳の方もおられるであろう。

五二二行から成っているこの中篇詩には長い題がある。長すぎるのでしばしば『大洋からシンシアへ』、または『大洋のシンシアへの愛』、または本書が用いた『シンシア』と略されてきた。「大洋」とは作者ウォルター・ローリーのこと。当時は大航海時代だったのでこの作者も海に出ていた。「シンシア」とは月の女神でエリザベス一世のこと。この月は光を広い世界にとどかせようとしていた。当時のイギリス国家をよく表わしている題名

だった。

女王からローリーに与えられた「福」が「禍」へと「変転」した、このことが何度も何度も嘆かれている。

ローリーの父親は地方の小地主で、宮廷に息子を出せるほどの資力はなかった。それでもこの息子は女王に可愛がられたので、女王の身辺を衛る近衛隊長になれた。ところがその「福」も「禍」に転じた。女王の侍女と秘密に結婚したのが女王の逆鱗にふれて、女王からの鼻疽は終ってしまった。隆盛から没落へというのはよくある話である。あの杜甫もまた、官僚としてしかるべき地位をえられないままに失意の生涯を送り、失意から詩が生まれた。『シンシア』も失意から生まれた。

この歌は最後は女王が去ったのを受け入れるようになっていく。悲しみ苦しみを、蜜蜂が蜜を吸うように吸って生きてゆこうという忍従にたどり着いている。ところが意外にも、もう一つの結論が隠されている。女王は去られたが、私の心の中にずっとおられるという信念が寡黙に語られている。二つの結論は併存しているのか、それとも一体になっているのかという問題がある。併存しているのであれば、二つのうちのどちらが重いかという問題もある。

この歌はただものではない。

『シンシア』にはたくさんの要素がある。

イングランドでは、一五九〇年代に危機が高じていた。大国スペインとの抗争が切迫していた。反国教会派による女王暗殺計画が続発した。国家を率いてきたその女王が老いてきた。国家を築いてきた重臣たちが続々と歿した。社会のモラルが墮落していた。『シンシア』は一五九二年に書かれたと分った。一五九〇年からの五、六年は、すでに危機が進んでいたが、危機がさらに進んだ後半ことに九八年と九九年とは違っていた。『シンシア』の結論である忍従と信念がまだ通用していた。忍従と信念は、従って『シンシア』は、書かれた一五九二年の風潮を正確に反映していた。

反映していたのはその時期の風潮だけではなかった。この歌には結論の真摯な内容に反する、不条理で残酷な要素が含まれている。その要素は九〇年代全体の要素であるのに加えて、一六〇三年から始まった、ジェイムズ朝により大きかった要素だった。

『シンシア』にはさらに、現代詩の要素がある。先に見た信念は、ことばでは十分に語られていないので、これが結論の一つとしてあるのを、読者が読みとらなければならぬ。読者の参加はどの時代の詩に対しても行われるが、特に現代詩に対してそれは行われる。だから『シンシア』は現代詩にも似ている。

これだけたくさんの要素を併せて持っている作品は、当時の作品の中でも珍しかった。ある研究者のことばを借りると、『シンシア』は「並外れた (extraordinary)」作品だった。

次に、本歌ではなく本書の内容について立ち入っておきたい。

本書が主にとり上げている歌『シンシア』は、作者の自己が定まっていな「断片」の集まりだと、かなりの数の研究者たちがこれまでに見てきた。しかしそれを欠点とは見ない擁護派もいた。本書は擁護派の中に入っている。理由は二つある。

『シンシア』には定まっていなところが確かにあるが、それは作者のせいだけではなく、十六世紀九〇年代という、変化が激しかった時代のせいでもあった。そう主張したのが学者だったエミス・ジョウンスだった。本書の見方はこの見方に賛同している。

次に、本書は『シンシア』全体を「準ソネット・シークエンス (連作)」だと見ていて、それがもう一つの理由になっている。普通のソネットは十四行だが、この「準ソネット」は十二行からなっている。「準ソネット」は一六〇〇年代に入ってからかなり見られるようになる。『シンシア』は「準ソネット」が連なっていて「準ソネット・シークエンス」である。なぜかこれまでにこのことが指摘されてこなかった。当時は「ソネット・

シークエンス」が大流行していた。そもそも「ソネット・シークエンス」というものは寄り道をするものである。だから『シンシア』にも寄り道がある。寄り道をしているのが自己が定まっていなせいでとされた。『シンシア』には寄り道はあっても、「ソネット・シークエンス」のようにならぬ広い本道がある。「断片」ではなく構想があり構想を実現している。

以上を本書はテキストに即しながら実証している。

詩についての研究書として、本書がもっている性格について付言しておきたい。

本書と第一部のタイトルには「蜜蜂」が出ている。第二部のタイトルには「苔」が出ている。これらは『シンシア』と『続シンシア』などに出ている心象（イメジ）である。これらが大きい働きをしている。だから「蜜蜂」などにタイトルに出てきてもらつた。出てきてもらつたと書かなければならない。それらは歌の中でいまも生きているからである。「蜜蜂」などがタイトルに出てきているところに本書の性格が表われている。詩についての研究書は詩を詩として読んでいなければならぬ。

長い「序説」を本文の前に掲げている。

これは長い「イントロダクション」（紹介）を本文の前に掲げる欧米のやり方に従っている。長い「序説」は古い時代の作品に対して必要である。議論が多い古い作品に対してはなおさら必要である。「序説」が一つの読み物になっているように願っている。

『シンシア』とそれに関連する、女王についての歌合計八篇は日本で初めて和訳されたはずである。女王についての歌はローリーが書いた歌の中心をなしている。

当時も今も先端的な諸歌、特に『シンシア』が、この訳出と解説を機にして専門家だけでなく一般の方々にも知られてほしい。